3．水泳競技部を例に

白木　孝尚[1)]

The approach of the BSSC swim team

Takahisa SHIRAKI

Key words：チャンピオンスポーツ，取り組み方，組織

1．はじめに

私が以前所属していた筑波大学は前身の師範学校そして東京教育大学から併せると130年以上の歴史がある。筑波大学の体育会課外活動団体（以下クラブ）もそれに応じた歴史や伝統を持っており，各クラブに所属している学生は，自分たちが活躍することだけでなく，先輩方が築かれた伝統を汚すことのないよう毎日の活動に真摯に取り組んでいるのが現状である。

びわこ成蹊スポーツ大学は2003年４月に開学し，わずか７年の歴史しかない。来年（2010年）の３月で４回目の卒業式を迎え，ようやく学生が１まわりするのである。体育・スポーツ系の大学であるため，クラブもいくつかあり，毎日の活動に取り組んでいるが，全国のトップで活躍できているのは水球（女子）や限られた個人だけで，これからも多くのことを学び，吸収し，発展していかなければならないというのが現状である。私は昨年（2008年）９月にびわこ成蹊スポーツ大学に着任すると同時に，水泳部競泳の監督に就任し，併せてコーチングも行っている。本報告では，昨年９月の着任以来，びわこ成蹊スポーツ大学水泳部競泳に対して考えること，感じること，やってきたことを中心に，本学がこれからどのような取り組みをしていかなければならないのかについての示唆を述べる。

2．着任時の状態

2008年９月のびわこ成蹊スポーツ大学水泳部競泳の学生達は，「自分が体育会の部活をやることの意味」を深く考えおらず，小さい頃から続けてきた水泳を大学に入っても「まぁ続けよう」と考えていたに過ぎなかった。そのため，与えられた練習には淡々と取り組むが，自分が一所懸命なのかどうか，練習内容がきちんと目的通りに消化できたかどうかなど，自分の競技に対する取り組みへの意識レベルがかなり低かった。もちろん，自己ベストを更新したいという意欲はあったが，そこに向かう過程は「先生が与えてくれる」程度にしか考えていなかったのである。活動に対しての意識レベルが低ければ，練習の内容は与えられた正規の練習を「ただやっているだけ」になり，「チャレンジ」とか「工夫」という考え方は学生の中には生まれてこず，コーチングしている側から見れば「面白くない内容」でしかない。それでも，私には過去に培ってきた経験があり，そのような取り組みでも最初の試合にベストを更新させるくらいの練習を提供することはできた。もちろん練習内容は，私が来る前よりは格段にキツくなっていたのは事実である。

3．最初のミーティング

12月１週目に最初の試合があり，前述し

1）競技スポーツ学科

たように私としては面白くない取り組みが続いたのにも関わらずベストタイムがそこそこ出た。その２日後に全体でのミーティングを持ったのだが，そこで学生にこの２ヶ月間の取り組みに関する感想と本来どうしなければならないかということを説いた。

まず伝えたのは「誰がやるのか？」ということである。「競技」というものは競技者自身が己の身体を駆使してパフォーマンスを表現しなければならないものである。要するに「競技」に対する本人の「欲」の強さによって取り組みが決まるものと私は考えている。自分に「欲」があれば，自分に対する「興味」が沸き，自分に必要な「取り組み」を考えていくはずである。コーチというのはそのための「サポーター」であり，ある意味「道具」であるため，選手がそのコーチを使って自分のパフォーマンスを向上させるという構図が理想に近い。私が10年間コーチングをやってきてはっきり理解していることは「意欲のない選手は大成しない」ということである。

次に伝えたのが，「満足してはいけない」ということである。競技をやっている以上，簡単に「満足」されていては上を目指せない。現に，オリンピックで金メダルを獲得した選手であっても「満足」することなく，更なる高みを目指していることが多い。「満足」を決定しているのは「目標」である。一般的に目標を達成すると「満足」することが多い。ただ，目標設定はいろんな側面から考えなくてはならない。１シーズンだけの目標しか持っていなかったら，その目標が達成された場合に次のシーズンへの意欲を持つことができなくなることも考えられる。長期的な目標を持ち，大学４年間でどのような選手あるいは人間になりたいのか？をしっかり自覚して取り組むべきである。それができていれば，簡単に「満足」することはないし，時間を無駄に使うことなく「競技」に集中できるはずである。長期の目標は高ければ高いほど挑戦しがいのあるものと考える。

他にもいろいろ伝えたミーティングであったが，本題として伝えたのは以上２点であった。このミーティング以降，少しずつではあったが，学生の取り組みの内容が向上してきたように思う。ただ，私自身も簡単に「満足」できない性分であるため，学生が付いてくるこないに関わらず，この先の目標に向かってただ邁進するだけである。

４．成果

2009年７月に開催された関西学生選手権で，びわこ成蹊スポーツ大学水泳部競泳は２部ではあったが男女とも団体優勝した。水泳部競泳では初めての優勝であった。４月に１年生が多く入り，戦力としては劣るが人数では負けなくなったことも優勝した要因である。自己ベストも数えきれないくらい更新し，表彰台にも上がってくれた。２年生以上の学生が，昨年から苦労して自分の競技に「欲」を持って取り組んでくれた成果だと私は考えている。１年生はあまり深い理解ができずに，ただ先輩たちに引っ張られていった人が多かった印象であった。

その年の９月に行われたインカレでは，思う様な結果を出せない選手が続出した。初めての全国大会というプレッシャーや，そういう大舞台で戦えるチーム力が備わっていなかったことが敗因であろう。こういうことの積み重ねがチームの伝統となり歴史を作っていくものと考えている。

５．これからの課題

2009年10月から新シーズンがスタートした。２部ではあったが実績を作り，１シーズンやり遂げたことが自信になったのだと思うが，昨年よりも余裕を持ったスタートだった。しかし，伝統や歴史がまだ築かれていないチームは，現在いろいろな苦難を迎えている。

まず上下関係など仲間との関係の程度である。これは歴史のないチームでは曖昧になる

ことが多い。仲が良い悪いはあっても構わないと思うが，組織の中での一定な関係は必ず保たなければならない。本学のクラブ活動に多く見られることだが，私生活とクラブ活動を混同してしまっていることで，普段の仲の良さがクラブ活動でも信頼できる人となることが多いと感じる。本来，組織の中での「信頼」は，組織の関わるクラブ活動で評価・判断しなければならない。そこに私生活が混同してしまうと，「仲がいい人＝信頼できる人」という本末転倒な関係が生まれる。チームでの活動の中で「切磋琢磨」という言葉がよく使われるが，本当の意味でお互いを高めたいのであれば，お互いにそして自分自身に厳しい態度をとることも必要になるはずである。特に，最上級生はチームの方針を決めたり，チームのまとめ役になることが多い。下級生が最上級生にどのような形で協力できるのか？ということを考えることができない組織は大きな生産性は持たないだろう。

次に，大学のクラブ活動で競技をすることの意味を考えることである。本学の学生の多くがクラブに所属している。所属していること自体は大変素晴らしいことではあるが，そこでの活動をやる意味を本気で考えられなければ所属している意味を持たない。大学体育会のクラブ活動は，基本的には「チャンピオンスポーツ」である。選手権やリーグ戦において，「びわこ成蹊スポーツ大学」の看板を背負って「戦い」に挑む訳である。そこでは己の限界を尽くし，試合終了の合図が鳴るまで，あるいはゴールにたどり着くまで全力を出し切らなければならない。全力を尽くすには，日常の練習から意識して取り組まなければならないし，試合に出るにはレギュラーを勝ち取らなければならないのである。目指さなければならないところがどんなに高くても，「自分なら絶対できる」と信じて毎日の活動に全力が尽くせるなら所属している意味が生まれるだろう。ただ，その競技が好きだからとか，やることが他にないからという理由で体育会のクラブ活動を継続することは危険である。本人はそれで満足であるとは思うが，他のチームメイトからは支持されない。組織内は意識の高い人と低い人とで二極化され，大きく分断される。チームスポーツであれば，試合に出場できない人のサポートは大きな力になることが多いが，二極化されたチームではそのようなことは決して起こらない。練習でも不平不満が続出し，それを解決させることにエネルギーを費やし，組織は「競技」での生産性を失っていくだろう。

来年度（2010年度）は開学から8年目に突入する。クラブ活動に関しても創設期から円熟期に移行していかなければならないと感じている。熟すためには伝統や歴史が必要になってくる。体育会クラブ活動の本質を見つめ直し，課外活動団体同士の連携を含め，体制や規律の見直しそして改革を進めていく必要性がある。体育会クラブ活動の円熟はやはり「チャンピオンスポーツ」の成績と，そこからの「人間教育」である。各クラブの競技力を上げるために，大学が一体となって「競技」に対して本気で取り組むこと，そして生産性のある「組織」を作ることで，本学のクラブが大きく発展できるものと考える。

参考図書

（1）小松成美（2008）トップアスリート，扶桑社.
（2）関島康雄（2008）チームビルディングの技術，日本経団連出版.